暮らしのぞき箱

季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

〜第四十一号〜

処暑　八月　二十三日

稲刈

「稲つむや痩馬あはれふんばりぬ　村山鬼城」。昔から俳人は稲刈をよく俳句に詠んできました。田の水を落とし、晴れた日に一気呵成に行う稲刈も、機械化にともなって馬や牛の姿は消え、季句のような光景は見られなくなりましたが、稲車、稲舟など稲刈にちなんだ古い季語は詩情があふれていて捨てがたく思います。

稲刈の頃、農家が恐れるのは立春から数えて二百十日と二百二十日。今年は八月三十一日と九月十日がこの台風が来襲するという厄日にあたります。けれど、東京消防庁の統計によれば、アイオン台風（S二三）、第二室戸台風（S三六）の九月十六日、洞爺丸台風（S二九）、狩野川台風（S三三）、そして伊勢にも多大な災禍をもたらした伊勢湾台風（S三四）の同二十六日と、この両日の方が台風の来襲が多く、台風来襲の特異日となっています。

もともと二百十日、二百二十日は江戸時代の暦学者、渋川春海が釣りをしようと品川沖に船を出そうとしたところ、老漁師に止められたのがきっかけで、渋川は過去を調べ研究し、自分が編纂した貞享暦に書き入れたもの。貞享暦は貞享二年（一六八五）から七十年間使われた暦ですから、時代を経て気象も少しずつズレてきているものの、今から三百二十年前の教訓が今でも生きていることに驚きます。

穂が出てから三十五〜四十日経って収穫の時期を迎える米。『神宮暦』には刈り入れ時の目安が記してありました。田が黄金一色に染まっても早く、穂を含めて稲株を手で握ると「かさかさ」と枯れた葉の音がする「枯熟期」まで待つのだそうです。しばらくは天候が気になる伊勢平野です。

文　千種清美

伊勢内宮前
おかげ横丁